

新美南吉は一九一三年、愛知県知多郡半田町字西折戸（現・半田市新庄町）で生まれた。夭逝した兄の名を受けついで、正八と名づけられた。次男である。父は、多蔵、母はりゑといった。生地は、岩滑新田といわれ、一六八一年の開拓地といわれる。国土地理院の二十万分の一の地図にも、半田市に岩滑の地名が見られる。「今から五十年くらい前、ちよūd、日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田の村に、巳之助という十三の少年がいた。」これは、「おじいさんのランプ」始まりの部分の冒頭だが、その岩滑新田が南吉の生地だ。

父の多蔵は畳屋の年季奉公を終えて、半島を横切る大野街道に面したこの土地に畳屋を開いていた。南吉誕生の時、二十九才だった。母は、南吉四才の時、二十八才で亡くなっている。母方の性が新美でだった。南吉は、母方の実家へ養子縁組をして新美と名乗ったが、その年のうちに帰ってきている。「南吉」は、中学生時代からのペンネームだ。母は、二十三才の時、多蔵のもとに嫁いできた。家と家との間によこたわる数々の障害を乗り越えて、愛情に結ばれた結婚であったという。南吉の文学は、生きることへの煩惱はあっても、生そのものへの否定がないことは、南吉の出征が良心に望まれた受けた生に対する自負の年によるといわれるが、ペンネームに新美ともちいたことも、若くして逝った母への気持ちだったかもしれない。

南吉もまた、三十才の若さでなくなるのだが、この郷里では、死ぬまで「畳屋の正八つあん」で親しまれたという。主なことがらを、年表ふうにまとめると、次のようである。

- 一九一三 誕生 先年夭逝した兄と二人分の知恵と身体をもつようと、同名に正八と名づけられた
 - 一九一七 四才 実母りゑ死亡
 - 一九二〇 七才 知多郡半田第二尋常小学校（現・岩滑小学校）へ入学。学年末に「操行養良・学術優秀」によって、郡長の表彰を受けた。おとなしく目だたなかったという。
 - 一九二一 八才 母方の実家、新美家へ養子縁組。落ちつけないで、三ヶ月ほどして、新美性そのまま実家へ帰った。
 - 一九二六 十三才 郡長の賞を受けて、小学校を卒業。愛知県立半田中学校（現・半田高校）へ入学。
 - 一九二七 十四才 交友会誌に「むくの実の思いで」を発表。この頃から、文学への関心が高まる。
 - 一九二九 十六才 少年倶楽部に「汽車」が入選。投稿は、他社をふくめて多くなった。後の「張紅倫」もこの年書き上げている。
 - 一九三一 十八才 中学卒業。岡崎師範学校を受験したが、身体が弱いため、不合格。三月から八月まで、半田尋常小学校代用教員。このとき、自作の「ごんぎつね」を教室で語り聞かせたりした。この作品を「赤い鳥」に投稿。翌年、発表になる。東京高等師範学校受験のため、上京。受験は失敗したが、与田準一・藪田義雄など、多くの人と知り合う。
 - 一九三二 十九才 東京外国語学校英語部文化文学へ入学。異聖歌宅に寄寓。白秋・三重吉と知り合う。
 - 一九三六 二三才 同校を卒業したが、軍事教練への欠席が多く、教員の資格が得られず、東京で就職した。二回目の喀血。帰郷した。
 - 一九三七 二四才 四月から八月まで、郷里の小学校で代用教員。
 - 一九三八 二五才 中等教員免許状をえて、愛知県あんじょう高等女学校教諭心得となる。
- 教師としての生活が充実し、生徒を対象にすえた作品の世界が拓かれていった。この時期に、堰を切ったように作品が生まれた。発表の場も次々に恵まれてきた。だが、健康には不安がつきまどっていた。
- 一九四三 三〇才 一月から病をおして筆を執り、「狐」「小さい太郎の悲しみ」「疣」を書き、「天狗」の執筆にかかる。三月二十二日、午前八時、半田市市字中郷の常病院前の離れで、多くの本に囲まれて、ただ一人、息を引き取る。咽喉結核であった。

教室の子どもたちにとっての南吉は、いちばん身近な作家の一人だ。教科書には、「てぶくろを買いに」や「ごんぎつね」がのせられているし、一年生用の大切な教材として、「はな」「みちこさん」があり、また、録音教材として「こぞうさんのおきよう（NHKみんなの図書室）」などがある。「おじいさんのランプ」などは、高学年用教材として親し

まれてきた。「がちようのたんじょうび」も彼の作品である。

年表によっても読みとれるように、彼が東京外語を卒業したころは、すでに、日本は十五年戦争の泥沼の中であった。中学校を卒業したのが一九三一年だから、この年、すでに戦争が始まり、大陸侵略が進められていた。そして、なくなった一九四三年は、第二次大戦のまったただ中、日本の敗色が濃くなった時期だ。彼は、文字通り、戦中の作家といふべき年代に属する。だから、南吉は、戦時下という特別な時世のもとで、児童文学にかかわりのある、ごくかぎられた人々に認められていたに過ぎなかった。彼が、再評価されたのは、没後十五年を経た、一九六〇年代を待たなくてはならなかった。このとき、戦後児童文学が一つの転機を迎え、欧米児童文学の吸収に熱心であった人々と、大正期以来の児童文学を守り育てる立場の人々との両方の支持を受けるかたちで、にわか注目されたといわれている。

南吉二十八才（一九四二）の時、早稲田大学新聞に「童話における物語性の喪失」を発表しているが、ここには、彼の作品に対する姿勢が見られて、興味をひく。この中で、「ジャーナリズムのかかわるやり方が、害毒を流してしまつた」から、文学も児童文学も物語性を喪失させられている。「小説が口から離れて、紙に移つたところから、小説の墮落が始まるのである」童話は、もともと、それが文学などという立派な名前で呼ばれなかった時分、・・・話であった。」から、今こそ、「物語性を取り戻すことに努力を払わねばならない。」と、彼はいう作家であったといわれる。彼は、その幼年期と彼をとりまく風土に大きく影響を受けているが、自己の記憶の中の幼年期を記録したのではなく、「じじつをもとに、創造の幼年期を形象化していった。その意識化の過程で、実在の対象である子どもたちに働きかけ、反応をとらえた。同時に、子どもたちを観察し、登場人物の描出に工夫をこらして、実在感豊かな人物像に仕上げていった。ここに介在した児童、生徒は、南吉の郷里である、尾張、三河の子どもたちである。当然、作者と受け手の子どもたちとに共有されるイメージは、郷土の風土が基盤となったことだろう。」（斉藤寿姫子）と言われるように、彼の作品は、話して聞かせる雰囲気があり、豊かな自然と風物があり、子どもの生活があるように思える。